

答えはすべて解答用紙に書きなさい。

一、次の文章Ⅰ・Ⅱを読んで、後の問いに答えなさい。

Ⅰ 手作りしてきたロボットたちを子ども向けの施設に連れ出してみることにしました。子どもたちは「ゴミ箱の姿をしたロボット」をどう捉えるのか。まだまだ研究の「問い」としては甘いのですが、ちょっと興味のあるところです。(中略)

すこし慣れてきたこともあり、「ゴミ箱の姿をしたロボット」たちのところにしばらく寄り添っていたり、一緒に歩みを共にする子どもたちも現れました。その歩みに先んじて、ぶつかりそうなものをどかしてあげたり、いたずらな子どもの手を払いのけたり、それはちょうど小さな子どもの面倒を見ているかのよう……。そんなときの子どもの表情というのは、どこか晴れやかで、なんだかとても大人びて見えます。

ちょうどそんなときだったでしょうか、一人の子どもが手にしていた紙袋を「ゴミ箱」の中に投げ入れたのです。ちよつとしたいたずらからなのでしょう。その振舞いに、たまたまロボットのセンサーが反応し、その上体を軽くかがめました。あたかもお礼しているかのように、あるいは「もっとー」とおねだりしているようにも見えます。

このことをきっかけに、他の子どもたちも一緒に、あたりからゴミを探して来てくれるようになりました。子どもたちとしては、「ゴミ箱の姿をしたロボット」を相手にただ遊んでいただけなのかもしれませんが、それでも「ゴミ箱」はゴミでいっぱいになってしまったのです。

自らではゴミを拾えないけれど、子どもたちの手助けを上手に引き出しながら、結果としてゴミを拾い集めてしまう、そんな「ゴミ箱ロボット」が生まれた瞬間でした。

「すごい、子どもたちの手を借りて、ゴミを拾い集めてしまったー」

「なんだか、ちゃっかりしているなあ」

「こんな他力【ア】なロボットって、あまり聞いたことがないかも……」

「でも、ちよつとズルくないかい？」

「いや、他の人の手を上手に借りるロボットって、なかなかスマートなんじゃないのー」

「まったくローテクなロボットのはずなんだけど……」

「子どもたちも、なんだか嬉しそう……」

「ゴミ箱の姿をしたロボットは、ただヨタヨタと動きまわっていただけ。それを目にした子どもたちの中には、「コイツは、もしやゴミを拾い集めたいのでは……」と感じた子どももいたでしょう。そこに意思のようなものを汲みとり、自分の出来る範囲でなにか応えてあげようとしたわけです。

そんな様子をしばらく眺めていたときです。幼稚園の年長さんくらいの、一人の子どもがその場を仕切り始めました。「この赤い子は、ペットボトルー」「ねずみ色の子は、紙くず専用だからねー」と、いつの間にかお世話係になってしまったようです。「ゴミ箱ロボット」の中に、ごちゃごちゃとゴミが放り込まれているのかわいそうに思っていたでしょう。勝手にゴミの分別を始めたので

なにごない遊びの中での一瞬の出来事でした。ロボットたちは、子どもたちを味方に引き込むことで、図らずも「ゴミを拾い集める」ことにくわえ、「ゴミを分別しながら集める」という新たな機能までも手に入れてしまったわけです。

①「えっ、これってロボットなの？ただのゴミ箱なのでは？」

「三つのゴミ箱が並んでいたら、ゴミの分別だって、ふつうにやるんじゃない？」

そんな指摘を受けるまでもなく、このロボットたちはとても微妙な立場にあります。「どこがすごいのか」とたずねられても、まだうまく答えられません。

ロボットに施してきた工夫といえば、ランドリーバスケットをポリバケツ風のデザインにしたこと。「ポリバケツ」そのものであり、「デザインしない、デザイン」というわけです。それと、ホイールなどが格納されている機構部分の上に「ゴミ箱」がのせられており、スプリングで連結されています。こうした工夫により、「ゴミ箱ロボット」のヨタヨタ感もなかなか上々です。

空き缶のフタで作られたホイールは、タイル床の細い溝の上でときどき空回りすることもあります。懸命に前に進もうとしても、なかなか思い通りにいかない。これらがあいまってなのか、「どこか不完全なだけけれど、なんだかかわい。放っておけない！」という気持ちをまわりの子どもたちから引き出してしまいうようです。おぼつかない姿で歩き始めた子どものような雰囲気でしょうか。もう一つ、子どもたちに受け入れられているのは、その「イ」としたところ「にありそうです。自分のことをあまり主張しすぎず、「ただのゴミ箱でも、ロボットでもどっちでもいいですー」、「どうにでも解釈してねー」という空気を醸し出しているのです。

(中略)

子どもたちは「ゴミ箱ロボット」の「思い」を勝手に感じ取っていた。その思いを一つにして、一緒にゴミを拾い集めていた。誰かのためにというより、みんながゴミを拾い集めているのが楽しい。自分にも出来ることがあり、その場に一緒に居ることが嬉しい。本当のところは知る由もないのですが、そんな風にも見えるのです。

この「ゴミ箱ロボット」のとリエの一つは、自分の中で閉じておらず、他に対して開いており、誰でもつなげられること。自分ではゴミを拾えない、ゴミを見つけないのもどこか頼りない。それでも、なにも気にせずに【イ】としている。ロボットの不完全なところが、結果として子どもたちに活躍の場をたくさん与えているようなのです。

子どもたちの気持ちというのは、とても気まぐれなもの。「そんな当てにならないものに頼っているの？」との心配もあります。ぼんやりしていたり、ちよつと乱暴な子どもたちもいて、それなりのリスクを覚悟する必要があります。「なんだコイツはー」とばかり、思ったほどのことではないとわかると、軽くけるようにして、その場を去っていく子どもたちもいます。

(中略)

「ゴミ箱ロボット」を広場に置いたときに、初めに思ったのは、「ゴミって、意外にも落ちていないー」ということでした。公共施設では、いつも掃除が行き届いており、ポイ捨てにくい場所なのかもしれません。あたりをウロウロしながら、ゴミを探しまわるのは、とても大変なことに思えるのです。

「自分の力だけで、なんとかしよう」との心意気は評価できるけれども、なぜだか弱いところ、苦手なところが目立ってしまったのです。一つでもつまずいたらそこに立ち往生してしまう。ロボットなのでまだ心が折れてしまうことはないにせよ、想定外のことに對しては脆弱であり、柔軟性に欠けるようなのです。

こんなときには、どうしたらいいのでしょうか。多くの場合、もっとも技術と磨かなければと工夫を重ねることでしょう。たとえば、「ロボットアームの先端をもっと柔らかな指先にしてみよう」、「アームの自由度を高めるために、その回転軸の数を増やしてみよう」と、その機能や能力の「隙間」をなんとか埋めようと工夫してみる。「ひとりでするもん！」を究めようというわけです。その能力や機能がまだ十分でないなら、新たな機能を追加してあげればいい。これは「足し算のデザイン」と呼ばれるもので、ある意味ではまっとうなアプローチなのです。

ただどうでしょうか。たまたまですが、「ゴミ箱ロボット」と子どもたちのかかわりを目にしてみると、すこし見方も変わってきます。「ゴミを拾うのが苦手なら、そんなことは子どもたちに手伝ってもらえばいいじゃないかー」と。「自分の力だけでなんとか」と自らの中に閉じるよりも、どこか「しなやかな強さ」のようなものを感じるのです。

これはどうしてなのでしょう。一つには、キカイキカイしたものにくらべて、子どもたちの能力は圧倒的に高いということもあるでしょう。ペットボトルを拾うのでも、カードのような薄いものを摘みあげるのでも、彼らの柔らかな手

にはありません。「本当によくできているなあ!」と思います。ちよつと狭いところにあるゴミも、器用に身体を小さく屈めながら、腕を伸ばすことが出来ます。無造作に捨てられたゴミなのか、誰かの大切な落とし物なのか、そんな価値判断もなんなく行えることでしょう。

ただ、ここですこし立ち止まって考えたいのは、「こうした子どもたちの〈強み〉は、〈ゴミ箱ロボット〉とのかかわりのなかで引き出されたもの、顕在化したものではないか」ということです。

「この手の柔らかさって、そんなにすごいことだったの?」と、ふだんは気にも留めていなかったことでしよう。「こんなことで貢献できるのなら、いつでもどうぞ!」というわけです。くわえて、〈ゴミ箱ロボット〉の思いを汲んで、みんながゴミを拾い集めたり、その進行の妨げにならないようにと、障害となるものを先んじてどかしてあげる。〈ゴミ箱ロボット〉の〈弱さ〉は、子どもたちの〈強み〉だけではなく、彼らのやさしさや工夫なども引き出していたのです。

多くの子どもたちが入れ替わり立ち代わり〈ゴミ箱ロボット〉とかかわっているところも見逃せません。一人の子どもの気まぐれに頼っているのは心もとないのですが、いろいろな子どもたちがときどき参加してくれる。その中で、お互いの〈弱さ〉を補いあいながら、それぞれの〈強み〉を引き出しあっている。

②「しなやかな強さ」というのは、こういう関係の中から生みだされるようです。先の「ひとりで行けるもん!」と強がっているはずでも、実は「とても脆い」と対照的に思われるのです。

Ⅱ ときどき注文をまちがえてしまうかもしれませんが、どうか承知おきください。そのかわり、どのメニューもここでしか味わえない、特別においしいものだけを揃えました……。こんな風変わりなレストランがあるそうです。その名も、「注文をまちがえる料理店」。

お客さんからのオーダーを間違えてしまうっていったいどういうことでしょう。実は、ホールで働くスタッフの多くは、認知症の方々なのだとか。お客さんのところに、注文したのとは違う料理が運ばれても、「こっちもおいしいそうだし、まっ、いいかあ……」と、そのことを受け入れ、楽しんでしまう。このゆるい雰囲気はとても心地よさそうです。

これまでレストランと言えは、どこかキリツとした緊張感がありました。お料理をテーブルに並べる所作にも、その調理に対しても、プロの技を期待します。サービスを受けるわたしたちも、ドレスコードなどに気を使い、ちよつとだけ襟を正している。そんな張りつめた場所だったように思います。

ところが「注文をまちがえるかも」と、ほんの少しスタッフたちの「弱さ」をさらけ出してみたら、お店の中のモードが一変することに……。スタッフの丁寧な応対に感謝しながら、お料理を受け取る。偶然の出会いを楽しみおうちに、まちがって運ばれてきた料理をありがたくいただく。その懸命な仕事ぶりをねぎらいつつ、片づけに思わず手を貸してあげる。お互いの立場を越えて助け合い、みんなが一つになって、「しなやかなシステム」を作り上げるのです。これって、なんだか懐かしい光景にも思われます。

(中略)

とても素朴な道具であるハサミなどの場合はどうでしょう。

ハサミはただ机の上に置かれただけでは、本来の機能を発揮できません。わたしたちの手の中にあつて初めて、紙を細かく切り刻む、布や糸を断つなどの機能が立ち現れてきます。その意味で、ハサミはわたしたちの手の働きを必要とし、その自在に動く柔らかな手がハサミの「弱さ」を補っているのです。

一方で、わたしたちの柔らかな手では、堅いひもなどを断つことは出来ません。手の柔らかさ(「弱さ」)は、ハサミの硬い鋼の手助けを必要とし、そこではハサミの「強み」を引き出しているのです。それと同様で、ハサミの「弱さ」は、わたしたちの手に備わる柔らかさを、今度は「強み」に変え、それを引き出していたのです。

「えっ、なんだか混乱してきた!」

「でも、ハサミが手の弱さを補うところまでは、よくわかる」

「まあ、それが道具の使命だからね……」

「で、ハサミの弱さを手が補っている。そうか、このあたりが微妙なんだ……」

…

「ハサミにも弱さがあるって、考えたこともなかった!」

「それと、手の弱さがいつの間にか強みに変わるって……」

「言葉遊びがすぎるんじゃないの……」

このように素朴な道具とのかかわりでは、お互いになんらかの「弱さ」を抱えつつも、その協働によって、とてもしなやかな関係性を作り上げるようです。このとき、お互いの「弱さ」は消えて、もはや見えないものに。ただそれぞれの抱えていた「弱さ」は、お互いの間でしなやかな関係性を生み出す「のりしろ」として、その背後でしっかりと機能しているようです。

素朴な道具がまだ世の中から淘汰されず、むしろ重宝されているのは、こうした理由からなのでしょう。

(岡田美智男「弱いロボット」から考える——人・社会・生きること)

注1…レストランにふさわしい服装のきまり

問一 直前の語と続けて四字熟語ができるように【ア】に入る漢字二字を答えなさい。

問二 ニか所ある空らん【イ】に共通して入る語句を次の中から選び記号で答えなさい。

ア ぼんやり イ なよなよ ウ しっかり
エ あつからかん オ すたこらさっさ

問三 —線部①について、〈ゴミ箱ロボット〉は、ただゴミ箱が並んでいる。ことどのように違うのでしょうか、説明しなさい。

問四 —線部②について、「しなやかな強さ」が「とても脆い」ことと対照的とはどういうことですか、具体的に説明しなさい。

問五 Ⅱの文章の「注文をまちがえる料理店」「ハサミ」にそれぞれふれて、これらの具体例に共通する考えを説明しなさい。

問六 Ⅱの文章に出てくる「注文をまちがえる料理店」は童話「注文の多い料理店」をふまえた店名だと考えられますが、この童話の作者を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア まど・みちお イ 新美南吉 ウ 工藤直子
エ 宮沢賢治 オ 谷川俊太郎

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

◇次の文章は、イギリス人旅行家「イザベラ・バード」と、通訳・ガイドとして同行する日本人の「伊藤鶴吉」が、会津盆地を旅する場面である。

その日は、イザベラが決めた目的地、田島まではたどり着けなかった。ひとつ手前の集落までが、せいっぱいだ。

こも泊めてもらえる家は一軒しかなかった。夜目にも軒が傾いているし、外壁の土壁も崩れている。

引き戸から一歩、中に足を踏み入れて、鶴吉は愕然とした。薄暗い土間に、目が痛いほど煙が充満していたのだ。こも馬小屋が一緒で、強烈な汚水の匂いも加わり、息を吸うのもためらわれた。

イザベラは煙で目を瞬きながら言った。

—またひとつ、笑い話が増えそうね—

だが現実には笑い話どころではなかった。部屋は鬼怒川沿いの宿を超える不潔さで、またもや蚤と虱の猛攻は避けられない。

家の主人が廊下で這いつくばり、額を床板にすりつけて謝る。

「汚い家で申し訳ありません。何かと行き届きませんが、こちらの奥方さまに、お泊まりいただけるような宿ではございませんで、何しろ汚くて、行き届きませんで申し訳なく」

くどくどと繰り返す。行燈の薄明かりでも、汚いことなど充分にわかるし、こちらの都合で泊まることにしたのだから、謝罪や言い訳など不要だ。這いつく

ばってまで卑屈になる態度も、鶴吉には苛立たしい。

「もういい。もういいから。とにかく夕食を頼む」

手で追い払う仕草を見ると、なおも申し訳ないを繰り返したAアゲク、正座したまま後すさり、深々と頭を下げてから襖を閉めた。

だが襖の隙間から、煮炊きの煙が入り込んできて煙いし、暑くてたまらない。鶴吉は立ち上がって、縁側の障子を開けた。

すると縁側には何人もの男女が、中腰でたむろしていた。今まさに、障子の隙間から中をのぞこうという姿だった。

鶴吉は、せいっぱい腹立ちを抑えて、低い声で言った。

「見世物じゃないんだぞ。あっちへ行け」

だが障子を開けたことで、なおさらイザベラへの興味が増したらしく、立ち去るところが背伸びをして、こちらをのぞき込む。

しかたなく大きな音を立てて、障子を閉めた。また煙が充満するし、暑くてたまらない。

女の奉公人が夕食の膳を持ってきた。小鉢のひとつに黒豆の煮物が盛られ、もうひとつにはきゅうりの煮物が入っていた。きゅうりを煮るのも、鶴吉には初めてだ。

飯と汁物は、後から出てくるのかと待っていたが、いつになっても出てこない。鶴吉が廊下呼びかけると、さっきの女が戻ってきて、飯はないという。

「じゃあ、後は何が出てくるんだ？」

女は身を縮ませて答えた。

「これで全部だよ」

夕食が、きゅうりと黒豆だけとは、自分の腹具合よりも、イザベラに対して申し訳なかった。

その時、ふいに縁側の方から小声が聞こえた。

「あの女、早く食べねえがな」

「洋なじょんして食べるんだべ」

声の方を向くと、いつのまにか障子に、いくつもの穴が空いており、ひとつずつ目が張りついていた。

その瞬間、鶴吉の堪忍袋の緒が切れた。大股で障子に近づき、カいっぱい開けて怒鳴った。

「何をしてる。あっちへ行けと言っただろうッ」

あつという間に廊下の端まで逃げていく。それでも鶴吉の腹の「ア」は収まらない。怒りが膳に向いた。

「飯がないって、何なんだッ。この辺は米どころじゃないのかッ」

会津周辺は土地が肥えており、米のできがよいはずだった。冷夏で不作になる時もあるが、このところ、そんな話も聞いていない。

たとえ去年が不作だったとしても、米を食べつくすのは秋の収穫前が多く、六月に米がないなど考えられなかった。

しかし奉公人の女は身を縮めるばかりだ。イザベラが制止した。

「イトー、やめなさい。のぞき見られるのは初めてではないし、食べものだって、ないのなら仕方ないでしょう」

すでに粕壁でも栃木でも嫌な目にあつて、諦めの境地らしい。

①鶴吉としては、イザベラの立場を慮って怒ったのに、本人に引き止められては、なおさら癪にさわる。

とにかく黙って夕食を終え、いつものように蚊帳を吊って、簡易ベッドを組み立てた。

(中略)

部屋に戻って寝ようとしたが、今度は家の中から子供の咳が聞こえた。そういえば、この宿に着いてから、ずっと続いている。それが耳障りでならない。

イザベラが蚊帳の中から言った。

「イトー、薬箱を出してちょうだい。それから、あの咳をしている子連れてきて。こんな煙たい家じゃ、咳も出るはずよ」

煮炊きは終わったものの、まだ家中がくすぶり続けていた。

鶴吉は、柳行李の中から薬箱を探し出して、子供を呼びに行った。すると咳き込んでいるのは男の子で、母親も心配してついてきた。イザベラの前に座つてもなお、咳は止まらない。

イザベラは薬箱から、小瓶を取り出すと、コルクの栓を抜き、男の子の口を開けさせて、ほんの二、三滴、舌の上にたらした。

男の子は飲み込んだ後、まだ少し咳をしていたが、母親と一緒に自分たちの部屋に帰っていった。それきり咳は聞こえなくなった。

イザベラは薬瓶をしまいながら言った。

「薬って、飲んだことがない者ほど、よく効くのよ」

外のお祭り騒ぎは続いており、この調子では、イザベラは寝られないだろうと、気の毒に思いながらも、鶴吉自身は床に入るなり、深い眠りに落ちた。

揺り起こされて目を覚ました。

「イトー、早く起きて。みんなに言つてちょうだい。私は医者じゃないってー起こしたのはイザベラだった。もう明るくなっており、なんだか騒がしい。ただ昨夜の騒がしさとは違う。」

鶴吉が目をごすりながら上半身を起すと、すでに障子が開け放たれ、縁側の向こうには、大勢の村人たちが押し合いへし合いで並んでいた。ロ々に言う。

「頼みます。うちの子にも薬をくだせえ」

「どうか、うちのばあちゃんも診てくだせえ。目が見えねえんだよ」

昨夜の子供の咳が治まり、その噂が、早朝から村中に広まったらしい。

「うちの子も、首とか背中とか、かゆがって、ほれ、こんなに腫れて」抱いていた子供の背中を見せつける。たしかに真っ赤にただれていた。ほかの子供たちも、たいがい皮膚病だった。まぶたが腫れて、目が閉じそうな子もいる。

鶴吉は慌てて起き出した。

「この女の人は医者じゃないんだ。診てもらいたかったら、ちゃんとした医者に行け」

するとひとり口をとがらせた。

「この辺にや医者なんかいねえし、遠くまで行けばいるげんども、診てもらう金がねえ」

見れば大人の着物は垢で黒光りして、袖も襟も裾も、擦り切れている。子供たちは揃って腹がけひとつの裸だ。

イザベラは哀しげな顔をした。

「みんなに分け与えるほど薬を持っていないし、助けてあげられないの。その代わり、夏は水浴びでいいから、皮膚の垢を落として、まめに着物を洗いなさい。清潔にすることが、いちばん大事ですよ」

鶴吉が訳して伝えても、村人たちは戸惑い顔だ。抱かっていた子供が、かゆがつて首をかきむしり、今度は痛くなって泣き出した。

イザベラは見かねて、柳行李から平たい缶を取り出した。そして子供を手招きして、ひとりずつ練り薬をつけてやった。つけてもらった者から、親が何度も頭を下げて帰っていく。

最後に目の見えない老婆と、その孫娘だけが残った。イザベラが気の毒そうに言う。

「白内障でしょうね。手術で治るけれど、私には、どうしてあげることでもないのよ」

老婆と孫娘は落胆して去っていった。

それから鶴吉は、いつものように手早く荷造りをして外に出た。昨夜は暗くてよく見えなかったが、どこの家も今にも崩れそうだった。そうとう貧しい村らしい。

ただし昨日、使いものにならなかった馬たちは、なんとか元気になっていた。荷を運んで載せているうちに、さっきの子供たちが戻ってきた。遠巻きにして、こちらを見つめる。

イザベラと鶴吉が馬にまたがって出発すると、子供たちが、ぞろぞろとついてくる。気がつけば大人たちも一緒だった。

鶴吉は手で追い払った。

「ついてくるなよ」

だが子供を抱いた男が首を横に振る。

「おらも、こっちに行く用があんだ」

平地の外れ、ここから山道に入るところまで、とうとう全員がついてきてしま

った。

さっきの男が鶴吉に聞いた。

「この女の人の国の言葉で礼を言うにや、何て言えば、いいんだべか。子供のかゆいのが治ったから」

「サンキューだ」

すると男は抱いていた子供の首筋を、何度も指さしながら、イザベラに向かつて拝むような仕草をした。

「サンキュー、サンキュー」

「サンキュー」

「サンキュー」

首のかゆみが治ったと伝えたいらしい。周囲の子供たちも、赤みが引いた自分の肌を指さして、ロタにBマネタ。

知らない言葉を口にするのが楽しいのか、かゆみが治ったのが嬉しいのか、どの子も飛び跳ねながら笑顔で言う。

「サンキュー、サンキュー」

イザベラも笑顔で応えた。

「どういたしまして。だいぶ、よくなったのね」

馬子が馬を促して山道に入る。イザベラが振り返って手を振ると、いっせいに手を振り返して、大声でサンキューと叫んだ。

鶴吉は大人も子供も好奇心から、ついてきたのだと思い込んでいた。だが彼らは別れを惜しみ、礼を言いたくて見送りに来たのだ。

鶴吉は急な山道で馬に負担をかけまいと、また鞍から降りて歩いた。

しばらく進むうちに、前に行く馬上のドレスの背中が、小刻みに震えているのに気づいた。驚いて駆け寄って聞いた。

「どうしたんですか。また腰が痛いですか」

そこで息を呑んだ。イザベラは泣いていたのだ。指先で目元をぬぐって言う。

「子供の病気は他人事じゃないのよ。自分が病気だったから」

もういちど涙をぬぐう。

「それに、あの子たちが健気で。あの村じゃ、きっと教育は受けられないでしょう。一生、あんな状態かと思うと」

鶴吉は別の意味で驚いた。見送りに心温まりはした。でも泣くほどのことかと。馬のかたわらを歩きながら聞いた。

「このことを本に書くんですか」

「そうね、書くわ」

馬上のイザベラを見上げて、思わずCゴキを強めた。

「それはやめてください。イギリスの人たちに、日本が、こんなところだと思われたら困ります。東京や横浜だけじゃなくて、私の生まれ育ったところだって清潔だし、ちゃんと医者もいるし、学校だってある。日本は世界のどの国よりも、読み書きのできる人が多いんです」

昔から寺子屋があるおかげで、都会や近郊での識字率の高さには、来日する西洋人が驚く。鶴吉は、それを誇りにしてきた。

しかしイザベラは首を横に振った。

「私が書くことによって、日本の政治家や役人が、この貧しさを何とかしなければと気づくでしょう。それが私にとって、あの人たちを救う唯一の方法なのよ」

鶴吉は、ふたたび驚いた。そんな意図があったのかと。

それでも日本の貧しさを、西洋人に知られるのは嫌だった。鶴吉には日本人としての矜持がある。こんな貧しい村が日本にあるとは、自分も知らなかったし、知りたくもなかった。

(中略)

今まで呑み込んできた言葉が、ほとぼり出る。

「田舎の貧乏で無知な日本人を、イギリスで嘲笑いたいんですか。そんなに優越感に浸りたいんですか」

イザベラは眉をひそめた。

「なぜ、そんなふうに考えるの？ 優越感とか嘲笑うとか」

「じゃあ、何のために、そんな旅をしようっていうんですか」

「本を書くためだって、何度も説明したでしょう」

「ミス・イザベラ・バード、あなたは日本の弱みをイギリスに報告して、国を乗っ取るきっかけでも作るつもりですか」

イザベラは笑い出した。

「何を言うかと思えば、わが大英帝国、日本を乗っ取るですって？ それも、こんな腰痛持ちの女の報告で？」

「でもイギリスはインドの内乱に乗じて、全土を植民地にしたし、清国では大量の阿片を持ち込み、アゲクに戦争を仕掛けて香港を手に入れた。あなたは日本にも内乱の芽や弱みがないか、探しに来たんじゃないですか」

鶴吉が一気に言い放つと、イザベラは気色ばんだ。

「とんでもない誤解よ。前にも言ったと思うけれど、イギリスが日本を乗っ取るつもりなら、明治維新の時に成し遂げていたでしょう。そうしなかったのは、日本人が賢かったからよ」

「田舎には無知な人たちもいます」

「それは事実だけれど、彼らを焚きつけても内乱の芽になかならない。皆、従順で無垢な人たちだし、どんなに貧しくても不満は抱いていない。だいいち最近の内乱は九州や西国でしょう。奥州の内乱は、明治維新の前に終わったはずよ」

イザベラは近年の西南の役はもとより、明治維新の際の戦争まで、すでに知識を持っていた。

「あなたが、そんなふうに疑ってたなんて心外だわ。まだ疑うなら、今までに私が書いた原稿を読んであげるわ。そんな意図がないってことが、はっきりするでしょう」

鶴吉も言い返した。

「けっこうです。あなたの原稿なんて、文句だらけなのでしょう。そんなのを聞いたら、腹が立つだけです」

「②私は眞実を書くだけよ」

イザベラは言葉に力を込めた。

「とにかく私は政治や外交には興味がないの。興味があるのは人間だけ。それも田舎の純朴な人たち。おぞましいほど不潔なこともあるけれど、イギリス人が忘れてしまった心を、彼らは保っていたりする。それをイギリス人に知らせたいの」

「それなら、もう嫌になるほど見てきたじゃないですか。もう充分でしょう」

「よく聞きなさい。会津盆地からのつらい山越えがあったからこそ、新潟にたどり着けた喜びがあるのよ。それを私は、もっと求めるだけ。ここで何週間も無駄に過ごすなんて、そんな何もない時間こそ、病気だった子供の頃だけで充分よ」

(植松三十里『イザベラ・バードと侍ボーイ』)

注1…どうやって

注2…昔、客や荷物を乗せた馬をひいて街道を行き来した職業の人

問一 □ A-Cのカタカナを漢字に直しなさい。送り仮名がある場合は、それをもふくめて答えなさい。

問二 【ア】に入る漢字一文字を答えなさい。

問三 —線部①とありますが、鶴吉が「なおさら癪にさわ」ったのはなぜですか。「イザベラの立場を慮った」とはどういうことを明らかにし、説明しなさい。

問四 鶴吉が、イザベラの書こうとするものを受け入れられないのはなぜですか、説明しなさい。

問五 —線部②とありますが、イザベラが書こうとしている「眞実」とはどのようなことですか、村人とのエピソードをふまえて説明しなさい。

受験番号

()

[illegible]

問五	問四	問三	問二	問一
				A
				B
				C